



こもれびの森の樹木 (9)

こもれびの森は大部分が落葉樹林ですが、5号でスギ、6号でヒノキとサワラを紹介しましたように針葉樹のエリアがあります。

樹名板を付けている針葉樹はほかにアカマツとクロマツがあり、マツ科マツ属に属しています。

マツは針葉の葉と松ぼっくりをつけ針葉樹の中でもっとも針葉樹らしいのが特徴です。

アカマツは別名雌松といい樹皮が赤褐色で若木では浅く、老木は厚く亀甲状に裂けます、緑色の針葉の葉が2本ずつつき、クロマツより細くやわらかく先端に触れても痛くない。アカマツは乾燥に強く、尾根筋などに生えています。日本の植林の大部分が針葉樹ですが、山に植林するとき「尾根はマツ、中（山腹）はヒノキ、沢（沢筋）はスギ」に植えられます。

クロマツは別名雄松といい、アカマツが山のマツに対して、海岸に多く、防風、砂防林としても植えられ海のマツといわれています。クロマツの樹皮は灰黒色で亀甲状に深く割れます。葉はアカマツより長く太い、葉の先端に触れると痛い、また葉は3年ほど枝に付きその後落ちます。

アカマツ、クロマツとも材は粘りがあり建築材に使われ、また燃料として火力が強いのでアカマツの木炭や薪が昔から使われてきました。

こもれびの森のコナラ、クヌギ等の落葉樹と同じように昭和35年ごろから石油などの化石燃料の利用や化学肥料が普及するようになって、マツを以前のように利用しなくなり、マツ林の風景が変りつつあったうえにマツを激減させたのがマツ枯れです。

マツ枯れはマツ材線虫病にかかって枯死したマツでマツノザイセンチュウの侵入によって引き起こされたものです、これまで薬剤の空中散布や伐採等の防除がなされてきましたが効果は芳しくないようです。

それでも日本にはすばらしい「白砂青松」の風景があります、昨年、松尾芭蕉の足跡を残す敦賀の「気比の松原」を見てきました、白砂とともに長々と延びるマツ林は静岡の「三保の松原」佐賀の「虹の松原」とともに日本三大松原で言われていますが、気比の松原はアカマツが六割を占めているのが珍しいとされています。ただ、気がかりは港に防波堤ができた影響で砂浜が移動し、昔に比べ砂浜が狭くなっているとのこと。失ってからでは自然の再生は難しく、この貴重な風景はいつまでも残さなければならぬと強く思いました。(林)

木もれびの森の野鳥たち

9月、夏鳥たちが各地で繁殖を終え、南を目指し帰っていく季節。木もれびの森にもキビタキ・サンコウチョウ・エゾビタキなどが、長旅途中の休憩や栄養補給の場として立ち寄ります。春のようにさえずりはないので、私たちの目にとまる事も少ないのですが・・・。

10月、木もれびの森にもコゲラ・シジュウカラなどの留鳥たちに今年生まれの若鳥が仲間入り。色づいてきた木の実を求め、飛び回る姿がよく目につくようになります。まだ草むらなどにはバッ



アカマツ



クロマツ

タなどの虫も活動中。鳥にとって、しばらくはメニューの豊富なきが続きます。そしてモズも戻ってきて、キィキィキィと高鳴きをひびかせることでしょう。（瀬尾）

<7月のホットニュース「カルガモ親子のお引越し!」>

7月11日、会員のKさんより『カルガモ親子が4丁目の住宅の路地を歩いている』と知らせが。カラスや猫にやられてはと見に行く。あたりに親子の姿はない。しばらくして路地から母さんを先頭に小さな子どもが7羽、団子状に固まってバス通り手前のゆるやかな坂を上ってくる。目的地は相模原ゴルフ場（池もあり、身を守る事ができるのでしょう）。親子は迷わず車道を横断。私たちは通る車に、一時ストップのお願いをする。何とか親子が渡りきると、親はゴルフ場のフェンスの破れ穴を必死で探し歩く。子どもも遅れまいと必死で後に続く。運よく通過できる穴を見つけ、無事、安全地帯に引越す。瀬尾） 写真提供（神谷）



キツネノカミソリ(狐の剃刀)

ヒガンバナ科 多年草 花期(8月～9月)

E地区の下草刈をしたところにはキツネノカミソリが8月5日頃から花を咲かせ、ところ所に群落をつくり朝日を浴びて美しさを一段と引き立たせています。

新葉は2月の終わり頃芽吹き、葉は日本剃刀のような形で7月には枯れてなくなります。7月の終わり頃、花茎を伸ばし突然に咲くオレンジ色の花をキツネ火にたとえて、剃刀のような葉と合わせて“キツネノカミソリ”というそうです。キツネノカミソリはヒガンバナ・スイセンと同じく毒草です。（田崎）



オカトラノオ(丘虎の尾)

サクラソウ科 オカトラノオ属 多年草花期—6～7月
茎は高さ50センチから100センチくらいになり、ヌマトラノオに似るが花穂の先端は垂れ下がり、葉は茎に互生し葉柄がある。ヌマトラノオの花穂は真っ直ぐに立ち、沼地など水辺に生える多年草。

オカトラノオは丘や草原に多く、花穂の形が長く垂れ下がり“虎の尾”に似ているのでこの名がついた。同じ場所に咲くオカトラノオの花穂は不思議に同じ方向を向いているのに心が引かれます。写真でも解ります。



植生調査地、A地区【1区画(5番)】に以前からオカトラノオらしき植物が群生していました。しかし花も咲かないので本当に“オカトラノオ”だろうかと思いつきながら1昨年A地区【2区画(21番)】の日ざしのある場所に数本移植し、昨年は本数も多くなりましたが花は咲きませんでした。本当にオカトラノオ?・・・と疑問を感じておりましたが、今年(2010年)は数もさらに多く数倍になり6月の中旬頃から花が咲き始めたのです。オカトラノオじゃないのではと疑っておりましたが、やはりオカトラノオで安堵、嬉しくなりました。やはり植物には日ざしがないとだめですね。改めて太陽の光が無いと植物は生育できず、花も咲かすことが出来ないと感じた次第です。来年はさらに数をふやして花をたくさん咲かせ散策の皆さんを楽しませてくださることでしょう。（田崎）